

## 辨榮聖者御垂示

佛法に門多しと雖もいえど要中の要なるものは念佛三昧門なり。念佛三昧門にまた方面多なりと雖ども、口に聖名みなを稱へ意こころに慈悲の聖容みかおを憶おもひ愛慕して止まざる時は面まのあたり慈悲のみすがたは想念の中におがむことを得べし。行住坐臥一切の作務さむに拘かかはらず憶念常に繫かかつて忘れざる時は必らず業事ごうじじょうべん成辨すべし。

—『御慈悲のたより』上巻一頁—

宗教は衆生をして人格的に靈活せしむるにあり。故に彌陀は、衆生を愛する大慈悲が相好に表はれ、萬徳圓滿なる人格と現はれ、如來の人格現は其の光明に接触する念佛者を人格的に靈化する爲である。彌陀の威神極りなく儼臨し給ふことは、げんりん衆生の人格を神聖ならしめんが爲にて、慈悲の相好は我等が内容を愛化せん爲である。

或<sup>ル</sup>禪<sup>ナ</sup>衲<sup>ニ</sup>云<sup>ク</sup>佛<sup>ノ</sup>本<sup>来</sup>在<sup>ニ</sup>我<sup>ガ</sup>方<sup>寸</sup>中<sup>ニ</sup>何<sup>ソ</sup>求<sup>メ</sup>西<sup>方</sup>十<sup>萬</sup>億<sup>ノ</sup>彼<sup>岸</sup>  
今<sup>ハ</sup>日<sup>ク</sup>淨<sup>門</sup>ノ意<sup>念</sup>ニ<sup>シ</sup>於<sup>テ</sup>佗<sup>佛</sup>一<sup>作</sup>於<sup>ニ</sup>自<sup>佛</sup>  
所<sup>念</sup>彌<sup>高</sup>遠<sup>ナ</sup>レハ能<sup>念</sup>心<sup>隨</sup>高<sup>遠</sup>

一<sup>心</sup>念<sup>ス</sup>佛<sup>即</sup>是<sup>ノ</sup>心<sup>作</sup>佛<sup>若</sup>得<sup>ニ</sup>三<sup>昧</sup>一<sup>是</sup>心<sup>是</sup>佛

念佛者乃心本尊波六十萬十萬億ノ奥行之堂

我<sup>ワ</sup>美<sup>ミ</sup>保<sup>ホ</sup>止<sup>ト</sup>計<sup>ケ</sup>農<sup>ノ</sup>慈<sup>悲</sup>乃<sup>オ</sup>面<sup>モ</sup>入<sup>留</sup>日<sup>乃</sup>加<sup>多</sup>仁<sup>映</sup>津<sup>呂</sup>邊<sup>天</sup>照<sup>留</sup>  
美<sup>ミ</sup>須<sup>ス</sup>賀<sup>カ</sup>太<sup>タ</sup>乎<sup>ヲ</sup>思<sup>オ</sup>保<sup>ホ</sup>邊<sup>ハ</sup>婆<sup>靈</sup>感<sup>極</sup>里<sup>奈</sup>加<sup>利</sup>鼻<sup>ケ</sup>

— 『宗祖の皮髓』口絵裏・原文のまま —

# 歡 喜 の 朝

こんじき におう しーのの めのー  
 けさの ひ かーりの なつかし さー  
 う つるーお じひの みすがーた にー  
 そ らも こ ころも あーさみど りー

【篇外】

## 歡かん喜ぎの朝あした

—木又敬廣—

(一) 金色こんじきにほふ、ししののめめの

けさの光ひかりの、なつかしさ

うつるおじひの、みすがたに

そらそら ころころも、あさみどり

(二) 又またとなき日ひの、今日きようの日ひぞ わが永遠えいえんの、わかれみち  
歡喜かんぎみなぎる、身みをさゝげいざやつとめん、このひと日ひ

# 感かん謝しやの夕ゆうべ

(歡喜の朝の譜に同じ二四二頁)

—木又敬讚—

(一) せまる夕ゆうやみ、くれの鐘かね み名なを念ねんじて、みあかしの  
み前まえをたてば、あら尊とうと 月つきにも照てれる、じひのおも  
光ひかりの中なかに、いさぎよく つとめしつかれ、こゝろよき  
感謝かんしゃに心こころ、みち足たらひ やすむおじひの、ひざの上うえ

御おじひの頌うた

(應身の讃の譜に同じ五五頁)

(一)

—木叉敬讚—

(一) なさけにもゆる親おやごころ

闇路やみじに迷まよふ我わが子こをば

大慈大悲だいじだいひのふところ

手てづから自みずから迎むかへとり

(二) 浄土じょうどのさとえり得えしめんと

あけ暮くれ我わ子こを案あんじつ々

ながき年月としつきまちわびし

大悲だいひの催もよおし甲斐かいありて

(三) 親子おやこ逢おふせのはなむしろ

通かよふ心こころの一ひとすじに

仰あおぎまつれば阿彌陀尊あみだそん

(四) 光ひかりさんらん輝かがやきて

我わが子こを念おもふ親おやの慈じ悲ひ

(五) もつれくして南無阿彌陀

子こを救すくはんの親おやごころ

(六) 子こを喚よぶ大だい悲ひのおん聲こえが

南無阿彌陀佛なむあみだぶつとわが聲こえに

端たん正じょう無む比びのみすがたは

這はひあがる子こを懷だきあぐ上る

おじひに縋すがる子この念おもひ

聲こえはほとけか吾わが聲こえか

やる瀬せなみまの濱はま千鳥ちどり

久く遠おんの光ひかりさしそひて

あらはれ給たまふ御ご名みょう號ごう

(相好)

(二)

(一) 罪つみにほろびし吾わが身みには

やみよりやみに落おつべきを

(二) 大悲だいひのみ手てにをさめられ

永遠とわの壽いのちに活いくる身みを

(三) うきわすらひも喜よろこびも

よかれよかれのみ心こころに

外ほかにたよらん方かたもなく

此度このたび本願すくいの縁えんにあひ

四智しちの光ひかりに融とけ合あひて

佛勅おおせの職務つとめに感謝かんしゃする

御親みおやに負おわれし吾われなれば

まかせ果はてたる我身わがみには



(四) 照<sup>てる</sup>もおじひ降<sup>ふ</sup>るも慈<sup>じ</sup>悲<sup>ひ</sup>

護<sup>まも</sup>念<sup>も</sup>らせ給<sup>たま</sup>ふみちからを

力<sup>ちから</sup>に苦<sup>く</sup>樂<sup>らく</sup>を越<sup>こ</sup>え精<sup>す</sup>進<sup>す</sup>む

命<sup>いのち</sup>の綱<sup>つな</sup>の南<sup>な</sup>無<sup>む</sup>阿<sup>あ</sup>彌<sup>み</sup>陀<sup>だ</sup>

(五) 仰<sup>あお</sup>ぐ三<sup>さま</sup>昧<sup>まや</sup>にすむ月<sup>つき</sup>は

俯<sup>ふ</sup>して足<sup>あし</sup>もと照<sup>てら</sup>す月<sup>つき</sup>

こオヤ離<sup>はな</sup>れじはなれなば

罪<sup>つみやみなやみ</sup>闇<sup>くら</sup>惱<sup>なご</sup>にとざさるる

(六) 聖<sup>みむね</sup>旨<sup>ね</sup>よ吾<sup>われ</sup>に現<sup>あらわ</sup>れよ

み國<sup>くに</sup>よこゝに格<sup>きた</sup>れかし

南<sup>な</sup>無<sup>む</sup>あみだ佛<sup>ぶつ</sup>南<sup>な</sup>無<sup>む</sup>あみだ

なむあみだ佛<sup>ぶつ</sup>あみだ佛<sup>ぶつ</sup>

# 大みおや

こ らを う れ一えの むねや せ て  
 な みだに ま 一つや たらちねの  
 ふ かき なさけの あふれより  
 み なよぶ ちかいと なりにけり

# 大みおや

—夏山敬讚—

(一) 子等を愁への胸やせて  
 涙にまつやたらちねの  
 深きなさけの溢れより  
 御名よぶ誓と成にけり

(二) あはれ御子みこはも幾千歳いくちとせ

己おのがつくりし罪つみとがの

ひしとからめる苦くるしさに

六むつの巷ちまたにすすり泣なく

(三) 父ちちを呼よびては伏ふしまろび

母ははを呼よびては血ちの涙なみだ

誠まことこめたる呼よぶ聲こえを

待まちわび給たまふみ佛ほとけは

(四) 慈悲じひの眈まなじりいとしげに

惱なやみの子こ等らを抱いだきとり

罪つみのいましめ解ときさとし

永と遠わのみ國くにに育そだてます

# 御 降 誕 歌

ひらけゆくよのねざめのゆかにく  
 しきいのちのなぞをばひめてあ  
 ずまのうみのひいずるしまゆみ  
 よみさかえのひかりはさしぬ

## 辨 榮 聖 者 御 降 誕 歌

— 夏山敬讚 —

(一) 開け行く世のねざめの床に

奇しき生命の謎をば秘めて

東の海の日出づる島ゆ

みよ光榮の光はさしぬ

(二) 安政六年如月廿日

救世の誓ひの胸やるせなく

昔ゆかりの名も鷲の谷に

法の御相分け出でましぬ

(三) 小金が原の曉の霜

筑波の山の夕ぐれの雨

ひまなくはげむ三昧の床に

無上覺位うけ継ぎましぬ

(四) 明き光の教への下に

千靈五百靈さきはひ榮ゆる

御法の父の世に生まれまし

けふのよき日をいざや祝はん

# 哀 悼 曲

静かに悲しみを以て

The musical score is written in a single system with eight staves. It is in a key signature of two flats (B-flat and E-flat) and a 4/4 time signature. The melody is written on a treble clef staff. The lyrics are written below the notes. The score includes various musical notations such as quarter notes, eighth notes, and rests. There are also some performance markings like 'rit.' (ritardando) and 'Y' (breath mark).

お ち ば ち り し く は つ  
ふ ゆ の あ し た  
う す も や い ま だ  
あ た り を こ め  
の ず え の は て に は や み  
き え う せ ず に  
か ぜ ふ く  
かなしみのひ

辨榮聖者哀悼曲

— 一郎敬讚 —

(一) 落葉散り敷く、初冬の朝、薄靄未だ、四邊を罩め

野末の涯には、闇さえうせずに  
風吹く、悲愁の日

(二) 無上無二なる、我師は逝きたり  
師走四日の、曉空

北國雪降る、時に先立ちて  
み 柩、雪蔽はむ

(三) 雪に埋みて、み骸うせはてぬ  
睫の涙、凍りはて、

人の胸の血は、冷たく冷えむに  
唄へよ、悲哀の曲

## 光明食作法（食前）

大ミオヤよ。我等は日々の糧を受けざれば活ること能はざると共に。アナタの恩寵の靈の糧によらざれば。法身慧命は紹くこと能はざるものなり。されば此の食を爲さんとするに先だちて。智慧と慈悲との聖き名を念じて。靈のいや増さんことを祈り奉る。お十念。

## 光明食作法（食後）

大ミオヤよ。アナタに与へられし靈の糧をば。我が信念によりて消化し。聖き命の力となして。世の爲め人の爲めアナタの光榮を顯すべき働きを爲し得るやう。恩寵を垂れ給へ。お十念。



目次

晨朝の禮拜

至心に歸命す	一
如來光明歎德章	三
至心に勸請す	六
至心に讚禮す	八
光明攝取の文	一四
總回向の文	一五
至心に發願す	一六
昏暮の禮拜	
至心に感謝す	一八
如來光明歎德章	一九
至心に懺悔す	二三

附録 光明聖歌集

至心に讚禮す	二五
光明攝取の文	三一
總回向の文	三二
至心に回向す	三三
如來の光	六二
應身の讚	五六
報身の讚	五〇
法身の讚	四六
三身の聖歌	四〇
念佛七覺支	四〇
聖きみくに	三六

如來讚	六七
光を獲る因	六九
光を獲たる果	七〇
光の生活	七一
聖衆の稱へ	七三
三相の聖歌	七三
諸根悅豫讚	七四
姿色清淨讚	七六
光顔巍巍讚	七七
念佛三昧	七九
七覺支	八〇
精進覺支	八三
定覺支	八四
光化の心相	八七
清淨光	八七

歡喜光	八八
智慧光	九〇
不斷光	九一
釋尊の本懐	九三
憶念の歌	九五
聖種の歌	九六
感謝の歌	九七
おほせのつとめ	一〇〇
よろこびのひかり	一〇二
聖意の現はれ	一〇四
正婚の頌	一〇五
育兒の歌	一〇七
むつみの正因	一〇八
入山學道	一一〇
禮拜	一一三

讚歎	一一四
回向	一一五
佛々相念の讚	一一八
靈鷲の月	一二二
一心十界の頌	一二四
のりのいと	一二九
いのちの葉	一三二
こゝろの眼(旧版一五〇)	一三四
忍のこゝろ(同一五二)	一三六
三禮・十二光佛讚禮	一三八
辨榮聖者御垂示	一四一
(篇外)	
歡喜の朝(同一三五)	一四四
感謝の夕(同一三六)	一四五

御じひの頌(旧版二三七)	一四六
大みおや(同一四二)	一五〇
辨榮聖者 御降誕歌(同一四三)	一五二
辨榮聖者 哀悼曲(同一四六)	一五四
光明食作法(食前、食後)	一五六